木之本ジュンの華麗なる推理！（河野裕一の事件簿より）

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
木之本ジュンの華麗なる推理！（河野裕一の事件簿より）

【Ｎコード】
Ｎ６０７６Ａ

【作者名】
桂　ヒナギク

【あらすじ】
身に覚えの無い殺人に探偵の裕一が殺人罪で逮捕。そして・・・。

序章

犯人：「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・。
畜生（くそっ）、何で俺が逃げなきゃならねえんだ！
はぁ、はぁ、元はと言えば・・・あの事件のせいだ・・・・。」
それは、始まりに過ぎなかった・・・。
犯人：「（そうだ、アイツにしよう・・・）」

ある日、裕一は目が覚めた・・・。
裕一：「（ん、此処は何処だ？）」
裕一は、自分が何処にいるか解らなかった・・・。
女性：「キャー！
人殺しー！」
え、人殺しだって？
裕一は、辺りを見渡した・・・。
すると、側に腹部を滅多刺しにされた男性の遺体が転がっていた・・・。
そして、裕一の手には・・・・・・・・・・包丁が一丁握られていた・・・。
裕一：「（お・・・お・・・俺・・・殺しちゃった？
一体何故？
全く持って身に覚えが無い・・・。）」
裕一は、ただ呆然と立ち尽くしていた・・・。

名探偵の殺人？

朝起きて、風呂入って、歯磨いて、朝食を取りながらテレビを見る・・・。

それがジュンの日課。

テレビ：『臨時ニュースです・・・。

本日、ＡＭ．６：００頃、提無逗川上流で男性の遺体が発見されました。

被害者は、阿相　忠孝２２歳。

阿相さんは、当テレビ局の社員で、生前は恨まれる様な事は一切無かったとの事です。

死因は腹部を包丁で滅多刺しによる失血死。

犯人は当時、現場にいた探偵の河野　裕一と見られ、通報を受けて駆けつけた警察はその場にいた彼を逮捕しました。

警察の取り調べでは、彼はやっていないとの事ですが、今の所ははっきりとは解ってはいません。

警察は証拠が出るまで一週間ほど捜査をする方針です。

あの名探偵が殺人なんてねぇ・・・。

本当ですよ・・・。

私はいつかやるなとは思ってましたけどね・・・。

それでは、ニュースを終わります・・・。』

え、裕一が逮捕された？

一体、彼の身に何が？

秀一：「裕一君が人殺しねぇ・・・。」

ジュン：「そんな嘘よ！

嘘に決まってるわ！」
秀一：「でも、ニュースは嘘付かないしなぁ・・・。」
ジュン：「御免パパ・・・。
あたし、警察に行って来る・・・。」
秀一：「ジュン、学校は！？」
ジュン：「裕一君のいない学校なんて行かない！」
ジュンちゃん、そんなにまで彼の事を・・・。
うんうん。
その気持ち、痛い程解るよ・・・。
秀一：「成る程、そう言う事か・・・。
ジュン、好きな子の為に頑張れ。」
ジュンは警視庁に来た・・・。
ジュン：「すいません、捜査一課は何処ですか？」
婦人警官：「二階に上がって、突き当たりを右に行けば捜査一課でございます。
所で、どんなご用ですか？」
ジュン：「そんな事教える必要無いわ！」
と、急いで二階に上るジュン。
そして、捜査一課に着いた・・・。
ジュン：「河野警部！」
裕二警部：「おぉ、ジュン君じゃないかね？
どうしたんだね、こんな朝早く・・・。」
ジュン：「裕一君に会わせて下さい。」
裕二警部：「裕一に面会か？
ダメダメ、今はマスコミも一般市民も面会謝絶、諦めな・・・。」
ジュン：「そ、そんな事言わないで会わせて！
お・ね・が・い。」
ジュンは、無駄に色気を見せた・・・。
裕二は、赤くなりながら言った。
裕二警部：「しょうがないな・・・。

今回だけだからね・・・。」
裕二は、ジュンを連れて裕一のいる拘留所へ行った・・・。
裕一：「良く来たな、名探偵・木之本　秀一の娘さんよ・・・。」
ジュン：「バカ、何で人殺しなんかしちゃったのよ！？」
裕一：「ま、待て！
俺は殺してなんかいない！
確かに、現場にはいたが・・・俺じゃないんだ！
その、なんと言うか・・・目が覚めたらあそこにいたんだ！
頼む、信じてくれ！」
ジュン：「私が一度でも貴方を裏切った事があって？
私は何時でも貴方に忠実よ。」
裕一：「良かった・・・信じてくれるんだな。」
ジュン：「当たり前じゃない。
で、何があったの？
詳しく話してちょうだい。」
裕一は、昨夜から事件当時までの間の事を話した・・・。
ジュン：「ふぅん・・・。
それじゃあ、昨夜の１１：００頃から記憶が無いのね？」
裕一：「あぁ・・・。」
ジュン：「それで、目が覚めたら提無逗川上流にいて、側に腹部を滅多刺しにされた男性の遺体があって、気づいたら凶器を持っていたって訳ね・・・。」
裕一は、頷いた・・・。
ジュン：「解ったわ。
あたし、やってみる。
何時も、貴方に迷惑ばかり掛けてるでしょ？
だから・・・。
貴方の無実、絶対に証明して見せるわ！」
裕一：「お前に任せて大丈夫か？
本当なら、俺自身で無実の罪を晴らしたいけど・・・。

親父が駄目と言うから・・・・。
解った、お前に命預けた！
絶対俺を此処から出してくれよな！」
ジュン：「任せて！
こう見えても、伊達に探偵の娘なんかやってないわ！
それに、愛・・・・。
いや、何でも無い。
じゃ、行ってくるからね。」
ジュンは、そう言い残して拘留所を後にした・・・・。

ジュンの捜査

ジュンは、捜査一課にある資料室にいた・・・。
ジュン：「（さて、まずは捜査資料ね・・・。）」
ジュンは捜査資料を捜した・・・。
ジュン：「（あ、あった・・・これだわ！）」
ジュンは、捜査資料を覗く・・・。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー　ーーーーーーー
1月28日、AM．6：00頃。
提無逗川上流で男性の遺体を発見。
被害者は、阿相　忠孝22歳。
死因は腹部滅多刺しによる失血死。
凶器は市販されている包丁・・・。
死亡推定時刻はAM．5：00〜6：00頃。
容疑者は高校生探偵の河野　裕一。
目撃者は犬の散歩中に偶々発見したと言う。
また、凶器は河野　裕一が持っていた・・・。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ジュン：「（何これ、いくら何でも無茶苦茶よ！
こんなんじゃ、容疑者は裕一君で決定かも・・・。）」
おいおい、お前・・・好きな子の為に一生懸命頑張ろうとしてるん
だろ？
だったら途中で投げ出すなんて駄目だって。
ジュン：「（え、誰！？）」
あ、いや・・・私は、神様じゃ・・・。
ジュン：「（神様？）」
そうだ・・・。

今回の事件・・・君にとっては初めての事件だったな。
だから、私が少し手を差し伸べてあげよう・・・。
ジュン：「（そんな、自分の力でやります！）」
そうか・・・。
ならそうしてくれ・・・。
だが、何か困った事があったら、何時でも相談に乗ってあげるよ。
ジュン「（はい・・・。）」
ＡＭ．１１：３０・・・。
ジュンは現場である提無逗川の上流にいた・・・。
ジュン：「（此処が現場か・・・。）」
ジュンは、被害者が倒れていた位置に立っていた・・・。
ジュン：「あれ？」
ジュンは、何かに気づいた・・・。
ジュン：「（血が中流の方から一直線に並んでる・・・。
と言う事は、被害者は別の場所で殺されたって事？）」
まぁ、そう言う事になるだろうな・・・。
ジュンは、血の跡を辿った・・・。
すると、川の中流に到着した・・・。
血痕は、此処で始まっていた。
そして、付近には血液が飛び散った痕跡があった。
恐らく、現場は川の中流だろう・・・。
ジュン：「（ねぇ、神様？）」
何だい？
ジュン：「（多分なんだけど、被害者って此処で殺されたのかな？）」
さぁ、そればかりは・・・。
流石の私も全てを見てる訳じゃないからね・・・。
ジュン：「（そっかぁ・・・。
この事件、本当に私の力だけで解けるのかなぁ？）」
むむむ、どう答えよう・・・。

作者は正直言って、ジュンに探偵は無理だと思う・・・。
ジュン：「（ねぇ、神様？
どうなの、私？
・・・・・・。
神様？）」
悪いけど、暫く話し掛けないでくれ・・・。
ジュン：「（どうして？）」
いや、それは・・・。
阿相さんの魂がこっちに来てて、地獄行きか天国行きか、決めている最中なんだ・・・。
ジュン：「（そっか。
御免ね、邪魔しちゃって・・・。）」
ふぅ・・・。
何とか切り抜けた・・・。
さて・・・・・・。
ジュン：「（あら、何かしら？）」
ジュンは、何かを見つけた・・・。
ジュン：「（ネックレス？
誰かの落とし物かしら？）」
待て待て、そう判断する前に良く確認しろ！
ジュンは、ネックレスを観察した・・・。
ジュン：「（こ、こんな所に血痕が・・・。
これって、重要な証拠になるんじゃ！？）」
そうそう、その調子、その調子♪
ジュンは、ハンカチにくるんでポケットにしまった・・・。
何か、順番が違う気が・・・。
ま、良いか・・・。
ジュンは警視庁に向かった・・・。
裕二警部：「ん、ジュン君。
今日も面会かい？」

今日は違うぞ。
駄目刑事のお前にビッグなプレゼントだ・・・。
ジュン：「あの、これ・・・。
事件現場に落ちていたんです・・・。」
ジュンは、ハンカチにくるんだネックレスを渡した・・・。
裕二警部：「あ、ありがとう・・・。
これは、証拠品だ。
大事に保管しとくよ・・・。」
そんな事よりジュン・・・。
何か忘れてないか？
ほら、拾った時に君の指紋が付着している筈だぞ？
ジュン：「あの、すいません。
それ、拾った時、素肌で触っちゃったんです。
だから、私の指紋が付いているかも・・・。」
裕二警部：「そうかい。
なら、君の指紋を取っておこう・・・。
こっちに来てくれるかな？」
裕二は、ジュンを鑑識課に連れて行った・・・。
鑑識のウメ：「河野警部さん、女の子なんか連れて来て・・・。
一体何をなさろうと？」
お前、からかってるのか？
裕二警部：「いや、この子は私の息子の友達で、その・・・事件の
大事な証拠に生身で触ってしまったって言うんで、指紋を採取して
貰おうと思ってね・・・。
これがその証拠品なんだけど・・・。」
裕二は証拠品をウメに渡した・・・。
鑑識のウメ：「預かります。
じゃ、これを手に付けて・・・。」
ウメは、手形を押す時に使うインクを取り出した。
ジュンは、そこに手を置いた・・・。

ジュンの手にインクが付着する。
鑑識のウメ：「それじゃ、この紙に押して。」
ジュンは、言われた通りに紙に手を押した・・・。
鑑識のウメ：「はい、これで終わりだよ。」
ジュンは、鑑識課を去った・・・。
裕二警部：「所でジュン君。
あのネックレスは上流のどの辺で見つけたのかな？」
ジュン：「見つけたのは中流です。
上流にあった血痕を辿ったら中流に辿り着きました・・・。
恐らく、川の中流が事件現場では無いかと・・・。」
裕二警部：「何だって！？
事件現場は中流！？
そんな馬鹿な！
だって、被害者は上流に倒れていたんだぞ。
それなのに中流が殺害現場！？
一体どうなってるだ？」
どうせ、遺体が歩いたんだろ・・・。
ジュン：「遺体が歩いた、生きてる間に・・・。
それか、犯人が意図的に動かしたとか。」
裕二警部：「そうか、だから上流に遺体があったんだ。
でも、何で裕一が上流に？」
ジュン：「裕一君、昨夜のＰＭ１１：００頃から記憶が無いって言ってたから、きっと誰かに眠らされてたのね。」
裕二警部：「と言う事は、裕一はシロか・・・。」
シロじゃなかったら容疑者か？
まぁ、兎に角これで疑いが晴れたんだ。
裕一を釈放してやらないとな・・・。
だが、それは無理に等しかった・・・。
何故なら、先ほど鑑識に渡したネックレスから裕一の指紋が見つかったからだ。

それだけじゃない。
被害者の指紋も一緒にだ。
ジュン：「（神様、どういう事？）」
さぁ・・・。
こればかりは運命なんじゃないかな？
ジュン：「（ねぇ、貴方は神様なんでしょ？
神様ならこんな運命、簡単に塗り替えられるよね？）」
そ、それは無理。
設定上、絶対に無理！
取り敢えず、裕一の指紋の謎については次話で明らかにしようよ・・・。

ネックレスに付いた裕一の指紋

ジュンは、拘留所に来ていた・・・。
裕一：「今日は何の用だ？」
ジュン：「ちょっと聞きたい事があってね・・・。」
裕一：「で、その聞きたい事ってのは何だ？」
ジュン：「ネックレス・・・。
現場に落ちていたのよ。
貴方の指紋が付いたネックレスが・・・。」
裕一：「それは、どんなネックレス？」
ジュンは、ネックレスの写真を見せた・・・。
裕一：「あ、これは！？」
ジュン：「知ってるの！？」
裕一：「知ってるも何も、これは俺がテレビ局のお姉さんにプレゼントした物だよ。」
ジュン：「な、何でまた！？」
裕一：「いやぁ、ほら、あれだよ。
この間の『突撃、有名人の家！』って言う番組でそのお姉さんが来たんだよ。
で、撮影が終了した後に聞いたんだ。
『私、誕生日にネックレス欲しい』って。
それで、その誕生日がそれを聞いた翌日だったから、プレゼントしたんだ。」
成る程、だから指紋が付いているのか・・・。
ジュン：「そうだったの・・・。
それより、そのお姉さんの居場所って知ってる？」
裕一：「ジュンはそいつが犯人だと？」
ジュン：「え、そうなの？」
裕一：「何だ、知らないのか・・・。

てっきり、ネックレスに付いている血痕から犯人を割り出したのかと思った。」
ジュン：「待った、何でその事を知ってるの？」
そう言えば何故？
裕一：「写真を見てみろ。」
ジュンは写真を見た・・・。
ジュン：「あ、血痕が写ってる・・・。
だから血痕が付いてる事に気づいたんだね。」
流石名探偵・・・。
鋭い観察眼の持ち主！
って、ちょと待て！
裕一は犯人の正体知ってるのか？
ジュン：「ねぇ、もしかして、犯人ってそのお姉さんのなの？」
裕一：「それは知らん。
お前の力で見抜いてみたらどうだ。
俺の命は今は君の手の中にあるんだからな。」
いや、それは違う・・・。
君の命は神同等の俺の手の中だ！
ジュン：「解った、自分の力でやってみる・・・。」
その息だ・・・。
裕一：「んじゃ、お姉さんの名前、教える。
お姉さんは、『小島　茜』だよ。」
ジュン：「ありがとう・・・。」
ジュンは、拘留所を後にし、例のお姉さんに会う為、テレビ局へ行った・・・。

突撃、テレビ局！

ジュンは、テレビ局に来ていた・・・。
理由は、前回の拘留所での裕一の証言を確かめる為である。
ジュン：「すいません、『突撃、有名人の家！』のスタッフの方達はどちらにいますか？」
すると、受付の女性が答えた・・・。
受付嬢：「どの様なご用件でしょうか？」
ジュン：「阿相　忠孝さんの件ついてお話を伺いたいのですが・・・。」
受付嬢：「申し訳御座いません。
当局では、事件に関わる様な事は一切受け付けておりません。」
すんなり通してはくれないか・・・。
仕方ない、助け船を出そう・・・。
ジュンが諦めようとすると、一人の男性がジュンに声を掛けた・・・。

男性：「何処でも入れるフリーパスはいかがかな？」
と、警察手帳を見せながら言った。
それは、裕二警部だった・・・。
ジュン：「河野警部、どうして此処に？」
裕二警部：「それは・・・成り行きと言うか何というか・・・。」
ジュン：「どうせ、ネックレスの事で裕一君に聞いたんですよね？」
裕二警部：「ま、そんな所だな・・・。」
裕二警部は、受付嬢に警察手帳を見せながら「突撃、有名人の家！」のスタッフに事件の事で面会を要求した。
受付嬢：「では、三階の『従業員専用』と書いてあるドアに入って下さい。
そこから二個目の扉がそのスタッフがいる部屋です。」
裕二警部は、それを聞くと、ジュンを連れてその部屋へ向かった。

「コンコン」と、扉を叩く。
すると、突撃のスタッフ（以降突スタ）が返事をした。
突スタ：「はい、どうぞ。」
裕二警部は、扉を開ける。
すると、そこには帽子を被った長髪の男が立っていた。
突スタ：「あの、どちら様ですか？」
裕二警部は、警察手帳を見せた。
突スタ：「あ、警察の方・・・。
もしかして、例の事件の事ですか？」
裕二警部：「お察しの通りです・・・。
えと、これを見て下さい。」
裕二警部は、現場に落ちていたネックレスを見せた・・・。
突スタ：「あ、これは数（かず）ちゃんの！？
一体、何処で見つけたんですか？」
裕二警部：「これ、例の事件現場に落ちていました・・・。」
突スタ：「じゃあ、警察は数ちゃんを疑ってるのですか？」
ジュン：「あの、その数ちゃんってのは？」
突スタ：「君は？」
裕二警部：「私の息子、裕一の彼女ですたい。」
ジュン：「彼女じゃありません・・・只の幼なじみです。」
突スタ：「あぁ、あの名探偵の許嫁（いいなづけ）の方ですね。」
ちょい待て！
作者はそんな設定にはしとらんぞ！？
一体どうなっとんじゃ！？
ジュン：「いやいや、許嫁じゃないです。」
突スタ：「え、君は探偵の工藤　雪穂ちゃんじゃないの？」
ジュン：「だ、誰ですかソレ？」
突スタ：「えぇ、知らないの！？
彼女は裕一君と同じくらい有名な探偵だよ。
最近の女子高生はそんな事も知らないの？」

あらら、言っちゃった・・・。
ジュン：「む、無知ですいません・・・。」
裕二警部：「まぁまぁ。
で、その数ちゃんってのは誰の事ですか？」
突スタ：「あ、すいません。
数ちゃんは、市ノ瀬　数葉さんの事です。
実は、そのネックレスって、誕生日に裕一君からプレゼントして貰ったんですよね。」
裕二警部：「では、その市ノ瀬さんに会わせて頂けませんか？」
突スタ：「そうしたいんですが、彼女と連絡が取れないんです。
何も無いと良いんですが・・・。
そうだ、一緒に数ちゃんを捜してくれませんか！？」
裕二警部：「はぁ・・・。」
ジュン：「（気が進まないな・・・。）」
三人は、数ちゃんこと市ノ瀬　数葉を捜す事にした。
いや、ちょと待て！
そのネックレス、「小西　茜さん」のでは！？
気になるな・・・。

小西　茜と市ノ瀬　数葉の謎

ジュン：「ああ！」
裕二警部：「どうしたんだね急に？」
ジュン：「私、思い出したんです！
そのネックレスの持ち主の名前、『小西　茜』って言うんです！
先日、拘留所で裕一君から聞きました。」
突スタ：「小西　茜？
あぁ、それは彼女の役者名だよ。
ほら、昔、『名探偵茜』って言う番組がやってたでしょ？
その時の主人公の名前が『小西　茜』なんだ。」
ジュン：「成る程、だから『小西　茜』って言ったんだ・・・。
あ、でも何で本名で言わなかったんだろ？」
裕二警部：「それは、役名しか知らなかったからじゃないか？」
それもあり得るな・・・。
ジュン：「（神様、そうなの？）」
え、あ・・・いや、その・・・。
実は良く知らんのだよ。
神様にも知らない事があるんだ。
気にしないでくれないか？
ジュン：「（そうだね・・・。）」
それにしても、何故に彼は「小西　茜」と名乗ったんだろうか？
一度、拘留所に行って聞くしか無いな・・・。
ジュンは、拘留所へ行った。
裕一：「今度は何だ？」
ジュン：「あの、『小西　茜さん』の事なんだけど、何で小西　茜
って言ったの？
彼女の本名、市ノ瀬　数葉って言うみたいだよ？」
裕一：「知ってる・・・。」

ジュン：「何で早く言わないのよ！？」
裕一：「だって、ほら、数葉って、殆ど本名知られてないし・・・。
だから、小西　茜って言ったんだ。
その方が解るだろうと思ってね・・・。」
ジュン；「ふぅん・・・。
で、何で『数葉』って呼んでんの？
普通、『市ノ瀬』じゃないの？」
裕一：「あ、いや、それは・・・。」
ジュン：「何かあるのね？
話せゴルァ！」
裕一：「何かって・・・。
中学の時に付き合ってた元カノだよ・・・。」
と、赤くなりながら言う・・・。
ジュン：「えええええぇぇぇぇっ！」
裕一：「何だよ、文句あるのか？」
ジュン：「裕一君、今まで付き合った女の子なんていないのかと思ってた！
てか、その市ノ瀬さんって、私たちと同い年なの！？」
裕一：「あぁ・・・。
１５歳で芸能界へデビューしたんだよ・・・。
それから、あの日までずっと会って無かったなぁ。」
ジュン：「あの日って？」
裕一：「２年前さ・・・。
２年前、彼女が『名探偵茜』の主人公になったと言う事で、俺に相談しに来たんだ・・・。
だってほら、俺は２年前に彗星の如く高校生探偵になったろ？
だから、相談に乗ってやったんだ。
それと、番組の探偵指導も俺なんだぜ。
それから、一度だけ役者として出た事もあったし、エキストラとしても出た事があったな。」

ジュン：「私はそんな自慢話を聞きに来たんじゃないの。
仕事で来ているの・・・。
解ったらとっとと彼女の住所教える！」
裕一：「俺、彼女の住所、知らないんだ・・・。
アイツ、中学卒業と同時に引っ越しちまって・・・。」
ジュン：「それじゃあ、彼女は居場所は分からないのね？」
裕一：「それが、一カ所だけ心当たりがある。
アイツ、極々偶にだけど、提無逗公園のベンチに座って読書している時があるんだ・・・。」
ジュン：「貴重な情報をありがとう。
行ってみるわ。」
ジュンは、拘留所を後にして提無逗公園に向かった。
拘留所を後にする時、裕一は何かを言ったが、ジュンには聞こえなかった・・・。

市ノ瀬　数葉との面会

ジュンは、提無逗公園に来ていた・・・。
理由は、極々偶にだが、ベンチに座って読書をしていると言う市ノ瀬　数葉と会う為だ。
ジュンは、辺りを見渡した・・・。
すると、一人の可愛い女の子がベンチに座って読書をしていた・・・。
その子の髪型はポニーテール、服装は制服。
おまけに、ジュンより可愛かった・・・。（木之本さん、御免なさい。）
恐らく、高校の制服だろう・・・。
ジュンは、その子の方へ歩み寄った・・・。
ジュン：「貴方が市ノ瀬　数葉さんですね？」
しかし、反応は無かった・・・。
ジュン：「あのー。」
無表情だ・・・。
読書に集中しているのだろうか？
次に、ジュンが取った行動は、彼女が読んでる本を奪い取る事だった。
ジュンは、彼女の本を奪い取った。
数葉：「ちょっと、何すんの！？」
市ノ瀬は、怒ってジュンを突き飛ばした。
ジュンは、尻餅を付いてしまった。
ジュン：「いててて・・・。
痛いじゃないのよ！」
数葉：「貴方が悪いのよ。
人の読書を邪魔して・・・。」
な、な、何なんだこの女！？

裕一はこんな凶暴な女と付き合っていたのか？
ジュン：「読書に集中してて人の話を無視するのもどうかと思うけど？」
数葉：「五月蠅いわね！」
と、回し蹴りをとばして来た・・・。
そして、ジュンは１メートルは軽く吹っ飛んだ。
はい、それ、暴行罪です。
数葉：「私はね、見ず知らずの人とは話をしない事にしてるの・・・。
それとも何？
貴方、私に喧嘩でも売ってるつもり？
だったらやめておく事ね。
何故なら、貴方は私には勝てないから。」
危ないぞこの女！
どんな神経してんだ！？
裕一の奴、良くこれで生きてこれたな・・・。
それとも、この女が只単に裕一に弱いだけなのか？
ジュン：「わ、私はただ、貴方に聞きたい事があって・・・。」
数葉：「私は貴方に話す事は無くてよ？」
ジュン：「そんな事言わないで聞いて聞かせて下さい。
人の命が掛かってるんです。
それに、裕一君だって・・・。」
数葉：「あんた、裕一君の何よ！？
もしかして、これ！？」
と、小指を突き立てて言う。
ジュン：「ち、違います！」
数葉：「まぁ良いわ。
貴方、裕一君の居場所を教えなさい！
彼、警察に捕まったんでしょ！？
言わないと・・・・・。」

市ノ瀬は、ジュンを脅してきた。
ジュン：「わ、解りましたから落ちついて下さい。
裕一君は、ただいま拘留所にいます。」
数葉：「拘留所ね、解ったわ。
貴方、お金は持ってるわね？
拘留所までのタクシー代を出しなさい。」
何コイツ・・・喝上げっすか！？
ジュン：「それくらい自分で出して下さい！」
数葉：「貴方、ボコボコにされたいの？」
き、危険だ・・・。
コイツ、何もかも全てが危険だ。
ジュン：「わ、解りました！
出せば良いんでしょ、出せば！？」
ジュンは、市ノ瀬にタクシー代を渡した・・・。
数葉：「何よ、片道しか無いじゃない。
往復分を出しなさい、往復分を・・・。」
ジュン：「それ以上は無理です！」
数葉：「そんな堅い事言わない！」
と、市ノ瀬はジュンが持っていた財布を奪って行ってしまった。
ジュン：「あ、待って！」
しかし、市ノ瀬はもういなかった。
ジュン：「（どうしよう・・・。
財布を盗まれちゃったわ・・・。
有り金全部使われるかも・・・。）」
それは困ったね・・・。
一方、拘留所では・・・。
数葉：「ゆういっちくーん♪」
裕一：「ん、か、数葉！
おめぇ、何でこんな所に！？
てか、警官の奴、良く通してくれたな・・・。」

数葉：「なんかぁ、通さないみたいな事言ってたけどぉ、どうしてもぉ、裕一君に会いたくてぇ、すっ飛ばして来ちゃった♪」
裕一：「す、『すっ飛ばして来ちゃった♪』じゃねえよ！お前は何で何時もそうなんだ？」
数葉：「私ぃ、いけない事しましたぁ？」
したよ！
てか、存在自体がいけねえよ！
裕一：「はぁ・・・。
呆れて物も言えないな・・・。」
数葉：「テレますなぁ。」
裕一：「褒めてねえって！
で、何の用で来たんだよ？」
数葉：「決まってるじゃあないですかぁ。
ゆういちくんを助ける為ですよ。」
市ノ瀬は、座っていた椅子を持ち上げると、正面のガラスに向かって投げつけた。
しかし、ガラスは割れるどころか、ひびさえ入らなかった。
数葉：「割れないですぅ。」
裕一：「ったりめえだろ。
このガラスは強化ガラスで出来てんだからな。
そんな簡単に割れたんじゃ犯人に逃げられちまう。」
数葉：「でも、新幹線の窓ガラスは割った事がありますぅ。」
裕一：「お、おめぇ、新幹線の窓ガラス割ったのかよ！？
すげぇ、なんて馬鹿力なんだ・・・。」
数葉：「いやだ、褒めないで下さいな。」
裕一：「だから褒めてねえって！」
数葉：「ショックですぅ。」
その時、杖をついてボロボロになったジュンが面会室に入って来た。
ジュン：「や・・・やっと・・・来れ・・・たわ・・・。」
裕一：「お、おい、ジュン・・・。

お前、何があったんだ？」
ジュン：「こ、この・・・きょ・・・凶暴な・・・お、女に・・・やられ・・・た・・・のよ・・・。」
裕一：「数葉、ジュンに何をしたんだよ！？」
数葉：「私ぃ、何もしてないですよぉ？
凶暴だなんてあんまりですぅ。」
裕一：「そうか、何もしてないか・・・。
って、俺がそんな事信じると思ってるのか！？
おめえの事だ、また何かしたんだろ！？
そうに決まってる！」
ジュン：「わ、私、この凶暴な女に喝上げされたわ・・・。
と言うか、財布ごと盗まれたわ・・・。」
裕一：「ねぇ、数ちゃん、ジュンに財布返してあげてくれない？」
数葉：「財布ならぁ、タクシーに乗る前に返しまたしたよぉ？」
ジュン：「返されて無い・・・あ、あった・・・。
でも、有り金全て抜き取られてる・・・。」
裕一：「お金も返してあげなさい。」
数葉：「これはぁ、私が、彼女から貰った物ですぅ。」
裕一：「駄目だこりゃ・・・。
ジュン、悪いけど金の事なら俺が返すから今は諦めてくれ。」
ジュン：「うーん・・・・・・。
解ったわ・・・。」
数葉：「それじゃあ、私はぁ、これでぇ、帰りますぅ。」
裕一：「待った！
ジュン、例の写真を。」
ジュンは、例の写真を取りだした。
数葉：「あらぁ、これはぁ、私のネックレスですぅ。」
裕一：「お前、昨日の夜何処にいた？」
数葉：「私ぃ、昨日は今朝まで撮影でしたぁ♪
その事ならスタッフの方達が証明してくれますよぉ。

でもぉ、一人だけ足りなかったですぅ。」
裕一：「それは誰だ！？」
数葉：「名前は知らないけどぉ、帽子を被った長髪のお兄さんですぅ。」
あっ！
アイツか！？
ジュン：「ありがとう！」
礼を言うと、ジュンは慌ててテレビ局に戻った。
数葉：「それじゃあ、私も帰りますぅ。」
と、市ノ瀬は拘留所を後にした。
数葉：「（裕一君、あの子の事気にしてたなぁ・・・。
何か、怒ってたもん・・・。
あの子の事、好きなのかな？
いやいや、そんな事は無いわ。
裕一君は、私の物よ！
誰にも渡さないんだから！）」
と、猛烈に萌える市ノ瀬・・・。
一方、テレビ局では・・・。
突スタ：「木之本さん、どうしたの？」
ジュン：「昨日の夜中、何処にいたんですか！？」
突スタ：「ロケ現場にいましたけど？」
ジュン：「それは、嘘ですね。
先ほど、市ノ瀬さんが証言してくれました。
撮影時間に貴方はいなかったとね！
一体何処に行ってたんですか！？」
ジュンは、スタッフに何処にいたか訪ねた。

事件の真相

ジュンは、スタッフに昨夜の撮影の時に何処にいたかを訪ねた。
しかし、スタッフは一向に口を割らない・・・。
そこで、ジュンは危険な掛けに出る・・・。
ジュン：「貴方は、昨夜から今日のＡＭ．６：００頃までの間、提無逗川にいたんじゃないんですか！？」
突スタ：「一体何の為に？」
ジュン：「被害者の阿相さんを殺害する為です。」
突スタ：「面白い。
君の推理を聞かせて貰おうか。」
ジュンは、自分の推理に不安を感じながら語った・・・。
ジュン：「あの日、貴方は提無逗川に被害者の阿相さんを呼び出し、そこで阿相さんになんらかの話を持ちかけ、口論となり、その末に殺害してしまった。」
突スタ：「確かに、僕は提無逗川にいた。
しかし、だからって殺したと言う証拠にはならんだろう・・・。
もし、僕が殺したんなら、その証拠を見せて下さい。」
ジュンは、例の写真を見せた。
突スタ：「そ、それが何だと言うんだ！」
ジュン：「動機・・・。
これが動機なんじゃないんですか？
恐らく、貴方は阿相さんと市ノ瀬さんの関係を知っていた。
そして、それを妬んでいた・・・。
だから、阿相さんを提無逗川の上流で殺害したんじゃないんですか？」
突スタ：「くっくっくっ・・・。
馬っ鹿じゃねーのおめえ？
阿相が殺されたのは中流だ！

上流な訳無いだろ！？」
ジュン：「何で知ってるの？
ニュースでは、上流で発見されたと言っていた。
そして、警察は中流で殺害されたと言う事は伏せていた・・・。
それなのに、知っていると言う事は・・・。
事件のあった日に、貴方は提無逗川の中流で阿相さんを殺害したからなんじゃないんですか！」
突スタ：「ぐはっ・・・。
ふっ、肝心な事を忘れているぜ。」
この期に及んでまだ何か？
突スタ：「凶器だ。
凶器はあの探偵が握っていたんだろ？
どうして握っていたんだろうな？」
ジュン：「あれは、貴方が罪を着せる為に、わざとそうしたんじゃないんですか？」
突スタ：「仮にそうしたとして、彼が起きていたら無意味じゃないか？」
ジュン：「それは無いですよ。
彼は寝ていたんですからね！」
突スタ：「そんなの証拠にもならんだろ？」
ジュン：「薬品を使ったんじゃないんですか？」
突スタ：「薬品？
なんと言う薬品だ？」
ジュン：「えーと、それは・・・。」
突スタ：「どうした、答えられないのか？
高校生が答えられる筈ないよな。」
ジュンが考えている所に救世主がやって来た。
裕一：「クロロフォルム・・・。
金子さん、貴方は僕にクロロフォルムを嗅がせ、僕がそれで眠っている間に阿相さんを殺害した。

そして、僕に凶器を握らせ、恰も僕が殺害した様に見せ掛けたんですよ！」
スタッフの金子：「あ、あんた、何故此処に！？
あんた、拘留所に入っていたんじゃ？」
裕一：「親父に事件の真相を話したら出してくれたんですよ。
『ねじ伏せて来い』ってね！
金子さん、貴方はあの日、提無逗川の中流で阿相さんと市ノ瀬さんが争っている所を目撃したんじゃないですか？
そして、市ノ瀬さんが帰ろうと、阿相さんから離れた時に、貴方は市ノ瀬さんに近づき、何が原因でもめていたのかを訪ねた・・・。
すると、『阿相さん、私にしつこくつきまとうんです、お願い、何とかして下さい！』と・・・。
拘留所から出た後に、市ノ瀬さんから聞きましたよ・・・。
だから、貴方は撮影で使う包丁を持って、阿相さんに近づき、阿相さんを提無逗川の中流で殺害し、阿相さんを上流に運び、偶々上流にいた僕にクロロフォルムを嗅がせ、眠らせた後に包丁を持たせたんじゃないんですか！？」
ジュン：「でも待って。
それじゃあ、裕一君がＰＭ．１１：００から記憶が無いのは何故？」
裕一：「あれは、ある人と待ち合わせをしていたが、時間には結局来なくて、待っていたら眠くなってそのまま寝ちゃって、目が覚めて時計を見たのがＡＭ．５：３０・・・。
そしたら、後から薬品嗅がされて眠らされたんだ。
だから記憶が無かったのさ。」
ジュン：「何だ、そうだったの。」
スタッフの金子：「貴様ら、人が下手にでて黙って聞いてりゃ良い気になりやがって。
貴様らも阿相と同じ様に殺してやる！」
すると、裕二警部が「待て！」とやって来た。
そして、金子に手錠を掛けた・・・。

裕二警部：「ぎりぎり間に合ったな・・・。」
裕一：「親父は殆ど出番ねぇんだからもっと早く出て来いよ・・・。」
裕二警部：「すまん、しかし、なんだ・・・。
二人とも怪我無かったんあだから良かったじゃねえか。
終わりよければ全て良しってな。」
やけに説得力あるな・・・。

こうして、事件は解決した。
ジュン、名推理だったぜ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6076a/

木之本ジュンの華麗なる推理！（河野裕一の事件簿より）

2010年10月9日07時37分発行